

平成三十一年度

# 国語

## 注 意

- 1 問題は1ページから5ページまであり、これとは別に解答用紙が1枚ある。
- 2 解答は、全て別紙解答用紙の該当欄に書き入れること。

(一) 次の文章を読んで、1～8の問いに答えなさい。(1)～(8)は、それぞれ段落を示す番号である。

- ① 「今どきの若い者はことば遣いになっていない。」と年配者が批判したのは昔の話。現代では、世代を問わず、人々はことばの正誤に敏感になっています。
- ② ためしに、インターネットの掲示板なり、SNSなりで、「頭が煮詰まって、原稿が書けない。」とつぶやいてみましょう。
- ③ 「その『煮詰まる』は、使い方が間違ってますよ。」
- ④ たちまち、そんな反応が返ってくるはずですよ。その発言者は、年配の人は少なく、若い世代と思われる人が中心です。
- ⑤ 右の「煮詰まる」を誤用と言う人の中には、自分自身の言語感覚に照らしてそう判断した人もいるかもしれません。一方、単に「メディアが誤用と言うから誤用だ」と考えている人も多いでしょう。
- ⑥ 平成二十五(二〇一三)年度の「国語に関する世論調査」の報告では、「煮詰まる」は「計画が煮詰まった」のように「結論の出る状態になる」の意味が本来とされ、「頭が煮詰まる」のように「考えが働かなくなる」の意味は新しいと位置付けられました。マスコミは後者を誤用として報道しました。
- ⑦ 慌てて言うておくと、実は、この二つの意味は、両方とも戦後になって辞書に載ったものです。どちらがより古い意味かは、実はよくわかっていません。A、後者を軽々しく誤用と批判することはできないのです。
- ⑧ そもそも、ことばには多義性があります。たとえば、「頭に来る」には、「腹が立つ」、「酔いが頭に回る」などいくつかの意味があります。その一つを取り上げて誤用と言う人はいません。同様に、「煮詰まる」の二つの意味のどちらかを誤用とする必要もないのです。
- ⑨ ともあれ、こうしたことば批判は、当否はともかく、昔は年配者の役割でした。ところが、現在では、年配者はあまり掲示板やSNSにはアクセスしません。その代わり、若い世代の人同士が、メディアなどで得た知識を元に、ネット上で誤用を指摘し合っています。
- ⑩ こういう状況は、人々の言語生活上、初めてのことで、個人の間で交わられた範囲では、そうむやみにことば遣いをとがめられる、という状況は考えにくいことです。
- ⑪ メディアがまだことばの誤用をそれほど話題にしなかった頃、年配者は自分の言語感覚に基づいて、若い人のことば遣いに注意を与えていました。特定のことばが社会的に「〇〇は誤用」と認定されるケースは少なく、人々のことばにはBが保たれていました。
- ⑫ ところが、メディアの発達と共に、「〇〇は誤用」という情報が社会的に共有されるようになり、情報ネットワークで一気に拡散する時代、年配者でなくても、相手のことばを簡単に誤用認定できるようになりました。C、その飛び交う情報の中には、「煮詰まる」の例のように、本当は誤用とは言えないものが多く含まれています。
- ⑬ 根拠の必ずしも明らかでない誤用説が、検証を経ないままに信じられ、一人一人の発言を縛ってしまう。人々の健全な言語生活のために、これは好ましくない状況です。
- ⑭ ことばには「これこれの言い方だけが正しい」ということはありません。少数派の言い方であっても、ある地域・世代などの限られた集団や場面で意思疎通の役に立っているならば、その言い方には立派な存在理由があります。どんなことばでも、一概に否定することはできません。そういう基本的なことが理解されず、ことばが〇×に仕分けられるのは憂うべきことです。
- ⑮ ただ、こうした動きに反対する見方も現れています。むやみに人のことばを誤用扱いする人は、ネット上で批判されるようになりました。そこには、正誤を簡単に決めつけることへの抗議の気持ちが表れています。
- ⑯ 誰しも、あることばに対して、個人的に正誤の判断を行う自由があります。ただ、その価値判断の基準が聞きかじりのネット情報というのでは、何とも心もとない話です。
- ⑰ 自分や周囲の人、親などが、これまで普通に使用していたことばを、安易に誤用として捨てるべきではありません。現在では、過去の文学作品などがネットで簡単に検索できます。実は伝統的な表現だったと、すぐにわかる場合もあります。本当に誤用かどうか、立ち止まって考える慎重さが必要です。

(飯間浩明『今どきの若い者』はことば遣いに関することばによる。)

(注1) SNSはインターネット上でのコミュニケーションを可能にしてくれるサービス。  
(注2) メディアは新聞・テレビ・インターネットなど、情報を伝達する媒体。  
(注3) アクセスはインターネットなどで、求める情報に接すること。

- 1 [6]段落の——線②「後者」と熟語の構成(組み立て方)が同じものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。  
ア 穏和 イ 緩急 ウ 就職 エ 筆跡
- 2 [4]段落の——線①「その」と品詞が同じものを、文中の——線a「そう」、b「これ」、c「そこ」、d「ある」の中から一つ選び、その記号を書け。また、その品詞名を漢字で書け。
- 3 [7]段落の [A]、[13]段落の [C] にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。  
ア(A) したがって C(しかも) イ(A) あるいは C(しかし)  
ウ(A) その代わり C(むしろ) エ(A) なぜなら C(つまり)
- 4 [17]段落の——線⑤「心もとない」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。  
ア かたくなで強引な イ 分別がなく軽率な ウ 頼りなくて不安な エ 思慮深くて慎重な
- 5 [9]段落の——線③「ことば批判」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。  
(1) メディアの発達以前に、年配者は何を基準として「ことば批判」を行っていたのか。最も適当な言葉を、[9]～[13]段落の文中から七字でそのまま抜き出して書け。  
(2) 若い世代の「ことば批判」について、本文の趣旨に添って説明した次の文章の [a]、[b] に当てはまる適当な言葉を書け。ただし、[a] は、最も適当な言葉を、[11]～[13]段落の文中から四字でそのまま抜き出して書くこと。また、[b] は、「情報」「社会的」の二つの言葉を使って、二十字以上三十字以内で書くこと。

若い世代の人同士が、インターネットの掲示板やSNSに投稿された [a] のことばを誤用と認定し、ネット上で指摘し合っている。その指摘は、メディアの発達に伴って [b] を元に行われている。

- 6 [12]段落の [B] に当てはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。  
ア 信頼性 イ 多様性 ウ 持続性 エ 優位性
- 7 [15]段落の——線④「そういう基本的なこと」とあるが、「そういう基本的なこと」が指している内容を、文中の言葉を使って、五十字以上六十字以内で書け。
- 8 麻衣さんは、本文の内容を検証してレポートにまとめようと考え、「ことばの誤用」を扱った情報番組で紹介された「爆笑」という言葉について調べた。次は、その際に取った【メモの一部】である。麻衣さんは、文中のある段落の内容に添って【メモの一部】をまとめている。その段落として最も適当な段落を一つ選び、その段落の番号を書け。  
【メモの一部】

「爆笑」…番組では、「大勢がどっと笑うこと」が本来の意味であり、一人や少数で用いるのは誤用と紹介。  
課題「私自身は、普段から一人や少数人数でも使っているが、これは誤用か？」例「私は妹と、爆笑した。」  
(一人や少数人数で「爆笑」を用いた例) (インターネットで調べた。)  
・「張飛が、爆笑すると、玄徳も笑った。」(吉川英治『三国志』昭和十五年)  
・「他の二人が声をそろえて爆笑する。」(寺田寅彦『三斜晶系』昭和十年)

(二) 次の1～4の各文の——線の部分の読み方を平仮名で書きなさい。

- 1 履歴を記す。
- 2 塗装が剝離する。
- 3 両手で荷物を抱える。
- 4 友人との話が弾む。

(三) 次の1～4の各文の——線の部分を漢字で書きなさい。ただし、必要なものには送り仮名を付けること。

- 1 新しい説をいしようする。
- 2 努力をとうらうに終わらせない。
- 3 皿に果物をもる。
- 4 柱で屋根をささえる。

(四) 次の文章は、高校一年生で放送部に所属する「宮本正也」と「僕(圭祐)」が、「月村部長」ほか三年生の部員たちと、東京で開催される全国大会の参加者五人を誰にするかについて話し合っている場面を描いたものである。正也は、スマートフォンを介した、人と人とのつながりをテーマとするラジオドラマ「ケンガイ」の脚本を担当し、全国大会出場の原因力となった。これを読んで、1〜5の問いに答えなさい。

アツコ先輩、ヒカル先輩、ジュリ先輩、スズカ先輩が、無言のまま、どうするの、とたずねるような顔を月村部長に向けた。部長は少し空に目をやり、意を決したような表情で口を開いた。

「私の代わりに、宮本くん、行ってくれないかな。」

えっ、と三年生四人だけでなく、僕も驚きの声を上げてしまった。

「私、実は、お兄ちゃんにJ.B.Kに連れて行ってもらったことがあるの。だから……。」

「やめてください。」

正也は静かに、だけど、力強く遮った。

①「僕、東京に行きたいなんて、一度も言っていませんけど。」

正也は月村部長にまっすぐ向き合った。

「だけど……。」

部長が口ごもる。確かに、僕も、三年生の先輩たちも、正也の気持ちを確認していたわけじゃない。

「そりゃあ、何人でも参加可能なら、喜んで行くけれど、他に行きたい人を蹴落としてまで、とは思ってません。だから、くだらない言い争いを、宮本のために、なんていう理由で続けるのなら、今すぐやめてください。」

「でも、いいの？本当に。」

「僕は東京に行くために『ケンガイ』を書いたんじゃないありません。どうしても伝えたい思いがあって、それを応募作として物語にする機会をもらえたから書いたんです。もちろん、それが県大会の予選を通過して、決勝で二位になって、全国大会に行けることになったのは、夢みたいにうれしかった。だけど、そのうれしさは物語が多くの人に伝わって、もっと多くの人に聴いてもらえるチャンスを得たことに対してで、決して、東京に行けるからじゃない。」

正也は落ち着いた口調で語ってはいるけれど、僕は正也の言葉の中に、怒りや悲しみを感じる。そして、<sup>②</sup>僕自身も物語に本当の意味で向き合っていなかったことに、<sup>③</sup>気づかされる。

東京に行かれないかもしれないから。

そんなことを気遣って、正也に連絡を取らなかつたのがその証拠だ。大会終了後、普通に作品の話をすればよかったのだ。「ケンガイ」のこと、他校の作品のこと。

この場でだって、純粹に「ケンガイ」が評価されたことを喜び合い、反省会をすればよかったのだ。

なのに、みんなの頭の中には東京に行くことしかなかった。「ケンガイ」を置き去りにした東京行きなんて、正也にとっては何の価値もないのかもしれない。

それでも……。本当に東京に行かなくてもいいのか、とまだ思ってしまう。全国から集まった高校生が「ケンガイ」を聴いているときの顔を、見たくはないのか、と。

「それに……。」

正也は続けた。

「今年は、僕、行っちゃいけないような気がするんです。<sup>④</sup>ビギナーズラックであつさり目標をクリアしてしまうと、来年、再来年、行き詰まったときに、まあいいや、って思ってしまう。そうなんですよね。とりあえず、一回、行けたらいい。」

正也はそう言っ、ニッと笑った。そのまま、右手の人差し指で鼻の頭をポリポリとかく。僕には、正也が自分自身を納得させようとかんばっているようにしか思えない。

「あと、『ケンガイ』は僕の採点では、三位でした。」

「えっ。」

月村部長が声を上げた。僕も驚いた。「<sup>⑤</sup>ミッシェン」のあとの反応を見て、正也もこれには負けたと思っているかもしれない、とは想像できたけど、三位とは。

「一位は『ミッシェン』、二位は『告白シミュレーション』。実際の順位が、六位と七位なのは信じられないけど、だからこそ、コンテストの順位よりも大事なものがあらんじやないかと、大会後からずっと考えてます。」

「『ミッシェン』は僕もゾワツときたけど、『告白シミュレーション』が『ケンガイ』より上なポイントって。」

「圭祐、声出して笑ってたじゃん。俺も笑ったし、会場の至るところから笑い声が上がってた。俺は、あんなに笑わせる脚本を書ける自信は、今のところない。ほら、一般的によく言われてるじゃん。泣かせるよりも笑わせる方が難しいって。」

「そうか……。ギャグやダジャレが出てくるわけでもないのに、おもしろかったよな。」  
僕は、うなずきながら、自分は誰かを笑わせたことがあるだろうか、と考えてみた。記憶にない。なるほど、確かに難しい。

「でも、正也。僕は『ケンガイ』の方がおもしろかった。おもしろいって、イコール、笑えるじゃないと思うから。」

うなずきながらも、これだけは伝えなければならぬと思った。正也がニツと笑う。鼻の頭はかいていない。

「宮本くん、本当にいいの？」

月村部長が、神妙なA<sup>3</sup>持ちでたずねた。

「はい。全国大会には、三年生の先輩たちで行ってきてください。僕は今日、こういう話じゃなく、『ケンガイ』や他校の作品の話を、先輩たちとできることを期待していました。」

さらりと放たれた正也のひと言に、部長は殴られたかのように顔をゆがめ、うつむいた。部長は部長なりに正也のことを慮り、自分が引いて正也を行かせるという苦渋の決断をしたのかもしれないけれど、それでも大切なことは見えていなかった。

(溱かなえ『ブロードキャスト』による。)

(注1) J B K II 全国大会の会場であるテレビ局の名。

(注2) ビギナーズラック II 初心者が、運よく好結果をおさめること。

(注3、4) 「ミツシヨン」、「告白シミュレーション」 II いずれも、他校のラジオドラマ作品の名。

1 線③「A」持ちが、「ある感情や心理の表れた顔つき」という意味の言葉になるように、Aに当てはまる最も適当な漢字を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 鼻 イ 物 ウ 面 エ 腹

2 線①「僕、東京に行きたいなんて、一度も言っていませんけど。」とあるが、全国大会出場に対する正也の発言と、圭祐が推察する正也の胸中について述べた次の文章のa、bに当てはまる最も適当な言葉を書け。ただし、aは、文中から三十字以上三十五字以内でそのまま抜き出し、その最初と最後の五字を書くこと。また、bは、文中から十五字以上二十字以内で、そのまま抜き出して書くこと。

正也は、全国大会出場の喜びを、aことに感じており、どうしても東京に行きたいとは思っていないと話す。しかし、圭祐は、東京行きを辞退する理由を話し続ける正也がbように感じ、正也が東京に行きたい気持ちを抑えているのではないかと推察している。

3 線②「僕自身も物語に本当の意味で向き合っていなかったことに、気づかされる。」とあるが、本文では、圭祐が、「ケンガイ」と向き合い、他校の作品と比較した上での「ケンガイ」に対する評価を、正也に伝える場面が描かれている。圭祐が、正也に伝えた「ケンガイ」に対する評価とその理由に当たる部分として最も適当な部分を、線②より後の文中から、連続する二文で抜き出し、その最初の五字を書け。

4 線④「部長は殴られたかのように顔をゆがめ、うつむいた。」とあるが、月村部長が「顔をゆがめ、うつむいた」理由について説明した次の文のa、bに当てはまる適当な言葉を、それぞれ文中の言葉を使って、十五字以上二十字以内で書け。

月村部長は、部長として正也のことを気遣い、aことを決断したが、bことが、正也にとっても、部にとっても、より大切であることに気づかされたから。

5 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

- ア 登場人物の視点から場面を描くことで、臨場感をもし出す効果を上げている。
- イ 隠喩や擬人法を繰り返し使用しながら、登場人物の心情を細かく表現している。
- ウ 現在と過去の場面を規則的に入れ替えて描くことで、物語に厚みを出している。
- エ 接続詞の効果的な使用によって、場面の転換や心情の変化を巧みに表している。

(五) 次の文章を読んで、1～3の問いに答えなさい。

東福寺の兆(注1)でんすは、わかきより絵かくことを好める。中にも竜の絵を心入りてかきけり。我もこのうへはとおもひ、人もすぐれたるやうにもてはやしける。

秋の日暮れかかり、何となうながめ出せば、人の声す。見れば、寺にまうでたる老人夫婦、縁のあたりより、でんすがかきおける竜の絵を、つくづくながめて難じけるは、「あはれよき筆づかひかな。よきことはよけれど雌雄の分かちを知らず。それ竜のかたち、角のさまそばだち、目ふかく鼻ほがらかに、たてがみするどくうるこきびしく、下ほど次第にそがれたるは雄なり。また、角なびけ、目大いに鼻なおく、たてがみまろくうるこうすく、尾と腹と異様ならぬは雌なり。」と語る。でんす心得ず、「いかにそこ(注3)には師伝(注4)ありて絵かけけるや。また、まことの竜を見てしか言ふや。」と少し怒りて、あざ笑ふを、翁笑(注5)つて、「げ(注6)にさぞおほすらん。証拠なきことを申さんや。まことは我らは竜なり。見覚えてよくかけ。」とて、たちまちかたちを変じ、雲に乗りて飛び去りぬ。

それよりしてぞ兆(注1)でんすが筆、妙に至り、寺中の竜にも不思議あるにおよぶと聞きし。

〔万世百物語〕による。

- (注1) 東福寺は京都市にある寺。(注2) 兆でんすは室町初期の僧である明兆(明兆)の呼び名。  
(注3) そこはあなた。(注4) 師伝は師匠からの伝授。(注5) しかはそれのように。  
(注6) げに二なるほど。

1 線①「まうでたる」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。

2 線②「少し怒りて、あざ笑ふ」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1) 老人夫婦の指摘に少し怒った様子から、でんすは自分の絵の腕前に自信を持っていたと考えられる。文中には、でんすの自信が周囲の評価とともに示されている一文がある。その一文として最も適当な一文を文中から抜き出し、その最初の五字を書け。

(2) 老人夫婦の指摘をでんすがあざ笑ったのはなぜか。その理由を説明したのとして最も適当なもの、次のア～エの中から一つを選び、その記号を書け。

- ア 老人夫婦の指摘が、大ざっぱで曖昧な内容であり、絵に対する理解の不足を感じたから。  
イ 老人夫婦の指摘が、絵に対する思い入れの全く感じられない内容であり、あきれたから。  
ウ 老人夫婦の指摘が、実物を見たかのような詳しい内容であり、でたらめだと思ったから。  
エ 老人夫婦の指摘が、自分の師匠も言っていない内容であり、的外れだと考えたから。

3 次の会話は、この文章を読んだ正彦(正彦)さんと久美(久美)さんが、先生と一緒に、——線③「兆でんすが筆、妙に至り、」について話し合った内容の一部である。会話中のa、b、cに当てはまる適当な言葉を書け。ただし、aは十一字で、bは六字で、最も適当な言葉をそれぞれ文中からそのまま抜き出して書くこと。また、bは、「竜」という言葉を使って、十字以上二十字以内の現代語で書くこと。

正彦さん 「どうして老人夫婦は、でんすに助言をしようとしたのでしょうか。」

久美さん 「絵の腕前を『a』と褒めながらも、不足しているところがあるでんすに、完璧な竜の絵をかいてもらいたいと思ったからではないでしょうか。」

正彦さん 「でんすは竜の絵が好きで、熱心にかいていたことが、老人夫婦には伝わっていたのかもしれないね。」

先生 「翁が、『見覚えてよくかけ。』と言った後で、老人夫婦が取ったbという一連の行動を、でんすはしっかり見たのでしょうかね。」

久美さん 「老人夫婦との出会いによって、でんすは、自分がわかっていなかったcを深く理解して自分のものにし、腕前がさらに上達したのだと思います。」